

# 第8回アジア国際皮革科学技術会議（AICLST）報告

## 1) インドの皮革産業とコルカタ

東京都立皮革技術センター 吉村圭司

### はじめに

アジア国際皮革科学技術会議（Asian International Conference on Leather Science and Technology、AICLST）は、アジア地域の皮革産業の発展に伴い、1992年10月に中国成都で第1回が開催された。中国で4回、日本で2回、韓国で1回と隔年で開催されてきた。今回、2010年11月12日から14日までインドでのコルカタ（旧カルカッタ、現在でもカルカッタとも呼ばれている）で行われた。また、IULTCSのアジア地域の会議としての開催となった。インドで行うとのアナウンスは早くからされていたが、正式なプログラムの発表はなんと3日前、何とものんびりした国である。

NPO法人日本皮革技術協会から4名が派遣された。日本からは3題の研究発表の予定であったが、1週間前に筆者に対し日本の皮革産業についてのプレゼンをするよう依頼があった。返事もしないうちにプログラムに掲載され、現地でプレゼン資料を作成する羽目になりあわてさせられた。発表は、口頭発表が42題、他はポスター発表であった。参加者の多くはインドからであったが、中国、台湾、日本のアジア諸国ばかりでなく、イギリス、アメリカ、スイス、イタリア等からも出席者があった。また、IULTCSの会議として、IUE（環境に関する会議）及びIULTCSエグゼクティブ会議が同時に開催された。

### インドの皮革産業

約12億人に達する人口を持ち、世界第2

位の人口大国であるが、将来は中国を抜くと予想されている。BRICsの一角とし、年率9%前後の経済成長をとげている。日本をはじめとする世界経済の低迷を考えると、インド経済の好調ぶりは際だっている。

その中で、インドの製革業は中国、イタリアに次いで世界で第2位とも3位とも言われている。1970年代に政府が付加価値を上げる方針を出し、クラストや製品革まで加工し輸出する方向へ転換した。1991年からは製品革のみが輸出可能となり、原皮や未仕上げ革の輸出は禁止された。また、同時に革製品の生産も盛んになった。主な生産拠点は、南部地域ではチェンナイ（旧マドラス）を中心とするタミルナードゥ州、東部地域ではコルカタのある西ベンガル



図1 インドとコルカタの位置

州、北部地域ではジャーランドルのあるパンジャブ州、西部地域ではムンバイ等のあるマハラシュトラ州である。

製革業は約2,000社、履物・履物部品工場は約2,000社、革衣料・革製品製造業は約1,700社である。現在でも、革と革製品はインドの重要な産業の一つであり、生産額は年間60億USドル、雇用数は250万人、過去5年間の実質成長率は10%と順調に伸びている。特に、靴等の履物の生産は世界第2位であり、世界の14%を占めている。

### コルカタと皮革産業

大会が開催されたコルカタは西ベンガル州の州都である。ガンジス川支流のフーグリ川東岸の低湿地に発展した都市である。人口は約1,500万人であり、ムンバイ、デリーに次ぐ、インド第3の大都市である。1686年にイギリス東インド会社が進出、1772年に英総督府の首都になり、1911年にデリーに首都が移転するまでイギリスによるインド植民地支配の拠点として発展した。現在でも当時の建物が数多く残存する。また、政治都市のデリー、商業都市のムンバイに対し、文化の中心といわれ、「歓喜の町」とも呼ばれる。アジアとして初めてノーベル文学賞を受賞したタゴールを生んだ町として知られ、ノーベル平和賞を受賞したマザーテレサが貧しい人たちのために活動した町でもある。

インドの他の大都市と同様に、貧富の差が激しく、特に都市のスラム化現象には歯止めが掛からない状態である。イギリスから独立した後、東パキスタン（現在のバングラデシュ）から流入した数百万人の難民や、第三次インド-パキスタン戦争時にバングラデシュから大量の難民が流入した経緯もあり、あちこちにスラム街が存在する。町には路上生活者があふれ、その数は300万人とも400万人とも言われている。

また、とにかく驚くのが交通渋滞である。ホテルから一歩外へ出ると、タクシー、バス、路面電車、自家用車、オート三輪、バ

イク、自転車、リヤカー、人力車、人が溢れている。そしてこれらがひしめき合いながら、ひたすらクラクションを鳴らし隙間を縫うように走る。車にはドアミラーやフェンダーミラーがほとんどない、前後左右の車間距離も無く、特に左右の車間は異常に狭い。人々は車の間を縫うように横断している。強引に出た方が勝ちである。

コルカタは、インドで2番目に大きな製革業の集積地である。製革業は、元々はイギリスの植民地時代に興った産業であり、フーグリ川沿いのTangra地域に集中していた。1920年代の大不況の影響で、イギリス人が手を引き、中国人がその後を引き継いだようである。その後、インド人の参入もあり次第にタンナー数は増加し約550社に達した。しかし、環境汚染の問題もあり、1996年にはコルカタ市内のTangra、Tiljala、Topsia、Pagla Danga地域のタンナーに対して、コルカタ市内から約15km離れたBantalaにあるカルカッタレザーコンプレックスへの移転が命じられた。タンナーの移動は2004年頃から始まったようである。そのため、廃業に追い込まれた企業も多く、中華街のタンナーの一部は中華料理店に模様替えをしている。市内でも一部はまだ操業しており筆者らも社内から、路上をリヤカーで革を運ぶ姿を何度となく見かけた。

(以下次号へ)



図2 中華街にあるタンナー